

社会的表象としての国際ソーシャルワーク

—開発の文脈における実践家の語りとの接点をめぐって—

東田 全央*

International Social Work as Social Representations: The Relation with Practitioners' Narratives in the Development Context

HIGASHIDA Masateru

論文要旨

本稿の目的は、国際開発にかかわったソーシャルワーカーの語りを参照しながら、国際ソーシャルワークの社会的現実の構成過程について、社会的表象理論の観点から探索的に検討することである。理論的には、国際ソーシャルワーク等の言葉によってある新奇な事象あるいは何らかの実践等が馴致される過程があるとすると、それは諸個人に浸透し、実践家の語りや物語と関連する可能性がある。他方、多くの関与者集団において、それらが明確には馴致されておらず、普及や浸透されるに至っていない可能性がある。しかし、そのことは、普遍的な国際ソーシャルワークの社会的表象が求められるということをも必ずしも意味するものでもない。本稿では、ポジショナリティの異なる関与者間の協働的实践と対話が、オルタナティブな言説を生み出し、新たな社会的現実の生成にかかわりうる意義について議論する。

キーワード 社会的現実、社会構成主義、協働的实践、アイデンティティ

Abstract

This paper explores how the social realities of international social work are constructed from the perspective of social representation theory whilst also examining the narratives of Japanese social workers involved in international development. Given the process of familiarising international social work, it would be related to practitioners' narratives and stories; yet it may not have been clearly familiarised and permeated amongst many stakeholders. However, this does not necessarily mean that international social work requires a universal or monophonic social representation. This paper discusses the significance of collaborative practice and dialogue amongst practitioners with different positionalities in co-constructing alternative discourses and social realities.

Keywords: social reality, social constructionism, collaborative practice, identity

* 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所主任研究員 ;
masateru.higashida@soc.shukutoku.ac.jp

1. はじめに

国際ソーシャルワークは、歴史的に多様な教育研究や実践がなされてきたが、多元的な概念と定義を含むため、ときに捉えがたい。日本国内においても国際ソーシャルワークは様々な観点から研究され教育の実践も行われつつあるが、それがどのような視点や要素を含むものであるかについて議論を深めることが求められている（松尾 2021）。さらに、国境を越える実践を含むソーシャルワークにかかる社会的なイメージは自己のアイデンティティにも関連しうるため、ソーシャルワーカー諸個人においても重要なテーマとなりうる（Lévesque, Negura, Gaucher & Molgat 2019）。本稿では、国境を越えて国際開発にかかわったソーシャルワーカーを事例として取り上げ、説明枠組みとして社会的表象理論を援用しながら、開発の文脈における国際ソーシャルワークの社会的現実について考察する。

国際ソーシャルワークの概念や定義は長年に渡って議論されてきた。歴史的には、少なくとも 1928 年に‘international social work’という用語が公的な場（第一回ソーシャルワーク国際会議）で使われたこと⁽¹⁾や、その後、様々な定義や要素の探求および論争がなされてきたことが指摘されている（秋元 2020; Healy 2012）。たとえば、Healy（2012）は国際ソーシャルワークが多元的概念であると述べつつ、これまで提案されてきた定義が、一般的なものか特殊なものか、広義か狭義か、あるいは機能に根ざしたものか価値に根ざしたものか等の視点から整理することができる、と指摘している。そのような背景を踏まえながら、Healy and Thomas（2020:7-8）は、国際ソーシャルワークについて、「人間の尊厳と人権を促進し人間の幸福を高めるための、ソーシャルワーク専門職とその成員による国際的で専門的な行動とその能力」（筆者仮訳）と定義し、国際的な行動の次元を 1）国境を越えて関連する国内の実践とアドボカシー（internationally related domestic practice and advocacy）、2）専門的な交流（professional exchange）、3）国際的な実践（international practice）、4）国際的な政策策定とアドボカシー（international policy development and advocacy）に整理している。

日本においても、「国際ソーシャルワーク」⁽²⁾という言葉が広く使用されつつあるとともに、その関心が高まりつつある。たとえば、国際ソーシャル

ワークをタイトル等を含む、和文で執筆された関連書籍や論考が近年いくつか出版されていることが象徴的である (e.g. 秋元 2020; 小原・木村・武田 2022)。図 1 に示すように、和文雑誌の簡易検索 (CiNii および Google Scholar を使用) によると、「国際ソーシャルワーク」をタイトル、要旨、キーワードのいずれか一つ以上に含む論文や記事等は全 28 件であった。同検索では 2006 年以降の文献がヒットし、近年増加傾向であるように見受けられる⁽³⁾。加えて、多様な文化的背景や海外にルーツがある人びととの実践を含む多文化ソーシャルワークや多文化共生への関心も高まっている (石河 2019)。

日本国内では、海外の議論との関連にも触れながら、国際ソーシャルワークの定義や枠組みが提示されている (秋元 2020; 小原他 2022)。国際ソーシャルワークの個別具体的な実践範囲は広範であり、対象には子ども、若者、高齢者、障害者、ジェンダー、貧困と不平等、人権問題、移民・難民、戦争・紛争問題、災害と防災、気候変動が含まれる (岡・原島 2020; 小原他 2022)。一方、領域や課題別の議論を越えたその概念や定義は様々な示唆を与える。たとえば、秋元 (2020) は国際ソーシャルワークについて、次のように述べている。

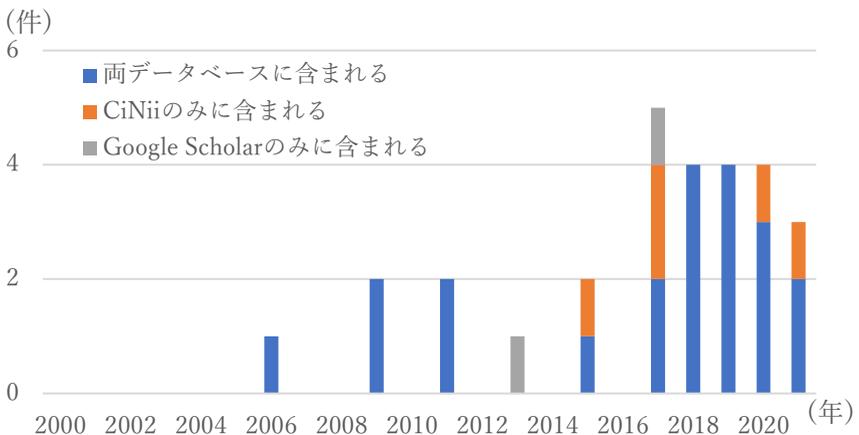


図 1 「国際ソーシャルワーク」をタイトル等を含む和文雑誌文献数の推移

註：データベース (CiNii および Google Scholar : 2022 年 7 月 21 日の検索結果) において重複する書誌情報があった場合は適した 1 件のみを抽出した。また、組織 (「国際ソーシャルワーク学校連盟」) やシリーズ名 (「国際ソーシャルワーク情報」) 等の固有名詞を含む。英文や「国際社会福祉」等は含まれない。2005 年以前にヒット件数はなかった。

対象は複数の国に関わる問題、それを抱える人びと、目的は地球上のすべての人びと（中略）のウェルビーイングの向上をめざすこと、不可欠の視点、理念は外からの目、複眼、複数または共通の物差しを用いること、特定の国、国民に特別の価値、優位性、劣位性を与えないことである。（秋元 2020:46）⁽⁴⁾

さらに、学術的議論の前提として、国際ソーシャルワークと（一般の）ソーシャルワークとの関係も重要な論点の一つである。たとえば、Healy (2018) は、「空想」として、将来的に国際的なソーシャルワークは専門言説から消えるだろう、と述べている。同様に、秋元 (2020:46) も「究極的には国際ソーシャルワークは国内ソーシャルワークの隅々に浸透する」と指摘している。議論の文脈は異なるが、「すべてのソーシャルワークは、したがって、国際ソーシャルワークである」(Ife 2001:13)、という主張さえある。これらの指摘は、国際ソーシャルワークが世界的に自明のものとして浸透することが考えられうる、ということを示唆する。

他方、実践家の間でどのように国際ソーシャルワークの社会的現実が構成され、日常世界に浸透し、それがどのように人びとに語られるのかという論点もある。そして、(国際) ソーシャルワークの社会的現実とは実践家の物語やアイデンティティにも関連しうる (Lévesque et al. 2019)。たとえば、国際開発の現場を例にとると、ある国から海外に派遣され長期の活動を行ったソーシャルワーク実践家や、「現地」⁽⁵⁾のソーシャルワーク実践家と住民はその活動をどのように位置づけるか、あるいは国際ソーシャルワーク⁽⁶⁾として語るのか、という論点がある——これは筆者自身がアジア諸国の実践現場で抱いた疑問である。ソーシャルワーク実践家等は、国境や文化をまたぐことによって、ある種の現実の裂け目 (Moscovici 1984; 八ッ塚 2001) を体感しうる一方で (いわゆるカルチャーショックを含む)、それを背景とした活動の意味づけや語りの難しさに直面しうる (Higashida 2021; Razack 2002)。言語化されていない何らか (something in the world) の実践や経験について (矢守 2001b)、海外から派遣され外部からかかわる立場の実践家が依存する理論や技術、実践家としてのアイデンティティは、(国際) ソーシャルワークと関連するとは限らず、また「現地」の実践家や住民の語りはそ

れとは異なりうる。たとえば、母国におけるソーシャルワーク、あるいは「西洋生まれ専門職ソーシャルワーク」⁽⁷⁾の応用を拠り所にする実践家もいることが推測される。しかし、そのような言説に基づく外部からの介入が他者や他の集団への押し付けになる場合には、「現地」の社会文化に沿わない、新たな植民地主義的な実践にもなりかねない (Higashida 2022a; 2022b)。

本稿は、以上の問題意識のもと、国際ソーシャルワークの社会的現実の構成過程について社会的表象理論の観点から探索することを目的とする。国際開発にかかわったソーシャルワーク実践家の語りの一部を参照し、かつ社会的表象理論を援用することにより、国際ソーシャルワークの社会的現実と実践家の物語との関連について探索的に議論する。

2. 実践家による国際ソーシャルワークの語りから

ここでは、実践にかかわる事例として、筆者および国際ソーシャルワークとみなせる活動に従事したことのある人びとの経験と語りの一部を記す。そして、実践家としてのアイデンティティとの関連を含め、その語りと国際ソーシャルワークとの接点に触れる。

筆者は日本でソーシャルワーク教育を受けた社会福祉士・精神保健福祉士である。大学等では国際ソーシャルワークについて直接学んだ経験はほぼ無いものと認識しており、かつ学術的な知識は皆無に近かった。日本の障害分野や精神保健福祉分野および災害被災地支援での経験を経て、スリランカとモンゴルでそれぞれ2年ずつ実践に携わった。国際協力機構 (JICA) により各国に派遣され、いずれも障害と開発の分野での活動を行った。それらの二国間における開発活動とソーシャルワークとの関係は筆者自身にとって明確ではなかった。その理由の一つは、それらの活動は、制度化された日本の社会福祉業界における実践とは大きく異なったからである (東田 2020a)。

実践と研究を同時に進めながら、Desai (2013) を参照して「国際開発ソーシャルワーク」という用語を用いて、国際福祉論の講義用の教材を作成した (東田 2021)。この教材では、国際ソーシャルワークの中でも、国境を越える課題に対して、開発的視点のみならず権力性への批判的視点も意識して

取り組むという発想に基づいて記述した（東田 2022）。

以上の個人的経験を経て、国際ソーシャルワーク実践家を対象とした調査（Higashida 2021; 2022b）⁸⁾において実践経験の記録や語りを分析した。JICA ボランティア（青年海外協力隊あるいは JOCV と同義）のうち2年間派遣された社会福祉関連職種（以下、JOCV ソーシャルワーカー）に対する半構造化面接で得られたデータの質的分析を通じて、国内の実践とは異なるソーシャルワークとしての位置づけについて等、様々な可能性と不明瞭さが示唆された。

たとえば、文化に適したソーシャルワーク実践の認識に関する試行調査（Higashida 2022b）には、4名の JOCV ソーシャルワーカーが参加した。国際ソーシャルワークについての積極的な語りは見出されなかったが、唯一、参加者である A 氏は、筆者の問いかけ（「日本で国際ソーシャルワークや国際福祉のようなことについて事前に学んだ経験や、何か関連するエピソードがあれば教えていただけますか。」）に対して、次のように語った。

国際ソーシャルワークについては事前には学んでおりませんでした。本当に、何もそういう時間とかそういう情報もないままに [JOCV に] 応募して。合格して行ってみて。(A 氏、2021 年 6 月 23 日)

また、A 氏は応募動機について、「[青年海外] 協力隊では広く経験をすることで自分も何か得るものがあるんじゃないかと思って、結局、JICA [ボランティア] に応募したんですね。」とも語っている。ソーシャルワークというよりは、JOCV や国際協力を念頭に置いていたと解釈することができる。別の参加者である B 氏も同様に、日本でのソーシャルワーカーとしての経験と国際協力の接点について次のように語った。

動機はまず中学生の時に青年海外協力隊っていうものを知って、なんかすごく、こう、憧れを抱いてたんですよ。国際協力とかもよくわからんけど、何かすごい、自分もそういう人に、何かそういう困ってる人を助けるような。(中略) 自分にはハードルが高いし、諦めて、じゃあその役に立つ仕事で福祉を選

んで、社会福祉士になって働いて。そしたら、なんかでもやっぱり国際協力ってなんとなく、こう興味自体は忘れられずにあって。(中略) [JOCV の] 説明会に行ったら、何かソーシャルワーカーの要請もあるし。(B氏、2021年5月30日)

他方、日本で実践経験があるC氏は、国際協力の文脈でソーシャルワーカーとして生かせる活動を模索していた、と語った。

二十歳くらいの時に国際協力のスタディツアーに参加する機会がありまして、そこでいずれはこういう国際協力の分野でソーシャルワーカーとして何かできることはないか、ということできずと模索しながら、という感じだったんですが。それで [青年海外] 協力隊で、実際のソーシャルワーカーの倫理・価値っていうものが、日本以外の国でどう生かすことができるのかなっていう思いがありまして。(C氏、2021年5月25日; Higashida 2022b:SI)

この調査を通じて、語られた経験には差異が見られるものの、JOCV ソーシャルワーカーに応募する人びとの間では、国際ソーシャルワークに関する知識や技術に接する機会が限られていることや、それらが関連付けて語られるほどには国際ソーシャルワークのイメージが浸透していない可能性があるのではないか、ということが推測された。そして、そのような実践と調査の経過の中で、社会的現実としての国際ソーシャルワークについての議論が、国境を越える実践とアイデンティティへの含意を得るのに役立つと考えた。

3. 社会的表象としての国際ソーシャルワーク

本稿では、社会的表象理論が、国際ソーシャルワークの社会的現実と実践家の語りや物語との接点を理解する一つの視点となることを提案する⁽⁹⁾。それは、国際ソーシャルワークの概念的な議論と実践的な議論との関係性への示唆を含みうるものでもある。はじめに、社会的表象理論の概要を記述し

たうえて、国際ソーシャルワーク研究における援用の可能性について議論する。

社会的表象理論は、Moscovici (1973; 1984; 2001) をはじめとする研究者によって、長年に渡って論じられてきた。それは、社会構成主義の観点から議論されうることから明らかなように、社会的現実の構成過程を捉えるアプローチと考えることもできる (矢守 2001b)。Moscovici は社会的表象について次のように説明する。

社会的表象とは、日常生活における個人間コミュニケーションの経過に起因する一連の概念、言明、説明である。それらは、私たちの社会の中で、伝統的な社会における神話や信念の諸体系と同等のものである。すなわち、それらは常識の現代版であるとさえいえるかもしれない。(Moscovici 1981:181 筆者仮訳)

言い換えると、「われわれの直面する現実には、あらかじめ社会によってつくられており、この現実をつくっているのが社会的表象である」(ハッ塚 1995:4) と説明することさえできる。

また、Moscovici は社会的表象の機能については次のように述べている。

その第一の機能は、諸個人が物質的および社会的世界の中で方向づけを得たり、それに精通したりすることを可能にする秩序 (an order) を確立することである。第二の機能は、社会的交流 (social exchange) のためのコードや、世界や個人および集団の歴史における様々な側面を明確に命名および分類するためのコードをもたらすことによって、コミュニティの成員間でなされるコミュニケーションを可能にすることである。(Moscovici 1973:xiii 筆者仮訳)

そして、社会的表象理論は、何らかの新奇な事象が人びとの日常世界において安定した社会的現実として構成される過程を主に分析するものである (Moscovici 2001; 矢守 2001a) ⁽¹⁰⁾。それは、ある新奇な問題や未知の事象 (the unfamiliar) 等が、様々なコミュニケーションを通じて、「命名」と「分

類」から成る「係留」(anchoring)と、「画像化」と「自存化」から成る「物象化」(objectifying)⁽¹¹⁾によって馴致される過程に着目する(Moscovici 2001; 矢守 2001a)。現代においては、科学的な理論や情報がそれらの馴致化にインパクトを与えるが、それは必ずしも人びとの日常世界における社会的表象とイコールではない。社会的表象は、常識との相互作用を含む、人びとの様々なコミュニケーションを通じて日常世界における社会的現実を生成する作用である、と考えることができる(Moscovici 2001; 矢守 2000b)。

社会的表象理論は、社会福祉やソーシャルワークの分野でも、限定的ではあるが、援用が試みられてきた(Widmark, Sandahl, Piuva & Bergman 2016)。近年では、ソーシャルワークの社会的表象と、それにかかわる専門職アイデンティティが分析されている(Lévesque et al. 2019)。その発展的な研究においては、ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ、生きられた経験(lived experience)、専門的苦悩の社会的表象の関連が指摘された(Negura & Lévesque 2022)。同様に、国際ソーシャルワークの諸言説により関与者の集団間において社会的現実が構成されうるものであり、その普及と浸透の過程を探求することは意義があろう(Higashida, Amarawansa & Chulani 2022)。

社会的表象理論を援用すると、日本を起点とした文脈において、国際ソーシャルワークの社会的表象について次のように仮想的な説明を試みることができる。ただし、ここでは支配的な言説として語られるかもしれない説明を例示するが、後述のとおり、批判的に検討されうるものである。第一に、国境を越える問題やそれに対する実践と教育にかかわる何らかの事象が「国際ソーシャルワーク」という言葉とともに語られうる(「命名」)。それは、ソーシャルワークや国際ソーシャルワーク等の学術的知識だけではなく、既存の実践的な枠組み、諸概念、比喩等(たとえば、「国連」、「持続可能な開発目標(SDGs)」、「難民」、「JICA」、「非政府組織(NGO)」、「援助」、「国際協力」、「開発」、「欧米先進諸国」、「途上国」)とともに語られ、人びとの日常世界に位置づけられ、意味づけられうる(「分類」)。第二に、ある種のイメージや人びとの体感とともに、その事象がありありと捉えられる(「画像化」)。日本においては、たとえばJICAや国際NGOの視覚的なイメージのように、国際援助活動が想起される場合があるかもしれない。それらを通じて、国際ソーシャルワークとして、より多くの人びとに語られ、あたかも以前から存在していたかのように捉えられうる(「自存化」)。加えて、

国際ソーシャルワークにかかる社会的表象は、出来事や体験、あるいは実践を慣習化させるとともに、諸個人はそれによって規定化されうる (Moscovici 2001)。言い換えると、諸実践家において、国際ソーシャルワークにかかわる事象や活動等の社会的現実が構成される過程を理論的には説明することができる。

そして、本理論に立てば、実践家個人において社会的アイデンティティとみなせるものも、馴致化や諸個人への浸透の過程において理解しうるものである。仮に「国際ソーシャルワーカー」や「インターナショナル・ソーシャルワーカー」(ブルグマン・高杉 2002) のような社会的アイデンティティがあるとすれば、それは集団の中で共有された社会的表象の結果として理解することができる (Wagner, Duveen, Farr, Jovchelovitch, Lorenzi-Cioldi, Marková & Rose 1999)。他方、諸個人の側に着目すると、各々が語るアイデンティティやその物語は単一のものというよりは、むしろ様々なアイデンティティが想定される (ヤング 2020)。たとえば、先に示した JOCV ソーシャルワーカーの語りからも示唆されるように、「ソーシャルワーカー」、「国際ボランティア」、「青年海外協力隊 (JICA ボランティア)」、「開発ワーカー」のような様々な社会的カテゴリーが存在し、それがどのように自己のアイデンティティとして位置づけられ語られるかは、人びとのかかわりの中での各個人に委ねられるだろう。したがって、諸個人間における浸透過程においては、どのように社会的表象としての国際ソーシャルワークが実践家の物語と関連しているかを探索する必要もある (Lévesque et al. 2019)。

しかしながら、「しうる」等として意図的に限定して記述したように、上記の説明はすべて仮想的な説明に過ぎない。次に述べるように単純には説明できない諸側面がある。

4. 国際ソーシャルワークの社会的表象にかかる諸側面

国際ソーシャルワークを社会的表象として捉えるとき、いくつかの議論されるべき問題に直面する。ここでは、流動的で多面的な社会的表象、多様な関与者とそこにあるダイナミクス、主流と周辺化された社会的表象、固有の文脈等に着目する。それらは、国際ソーシャルワークに関して、諸個人

の日常世界において馴致される以前の何らかの事象や言説、そして、その社会的現実の生成と変容の過程を分析する必要があることを示唆するものである。

第一に、時間軸を考慮すると、国内だけではなく国際的な文脈においても、ソーシャルワークや国際ソーシャルワークにかかわる様々な学術的言説が見られる (Gray, Coates & Yellow Bird 2008)。各時期⁽¹²⁾によって国際ソーシャルワークにかかわる新奇な事象や実践は相対的あるいは流動的であり、結果としてひとまとまりの言説というよりは多元的言説あるいは認知的多相性⁽¹³⁾ (cognitive polyphasia) (Jovchelovitch & Priego-Hernandez 2015; ハッ塚 2014) を示しうる、という方が適切かもしれない。それは多様な定義、幅広い範囲の実践、それらに対する関与者の声等が示唆するとおりである (Karikari & Bettmann 2013)。さらに、筆者が現場で体験したように、学术界と実践家の間における社会的表象の差異もありうる。いずれにしても、マクロなレベルでは、「国際ソーシャルワーク」という言葉によって、何の事象や実践もいまだ馴致されていないとは言えない一方で、それらは実践家の日常世界において馴致されたもの (the familiar) とも言い難いという、過渡期的であいまいな状況⁽¹⁴⁾があるのではないかと考える。しかしながら、本稿は統一的あるいは普遍的な国際ソーシャルワークの社会的表象が必要である、ということを主張するものではない。実際、それは「現在の世界共通の物差しの不完全さを認識し、常に複数の物差しを用いることを忘れない」ことの重要性についての秋元 (2020:46) の指摘に通ずる。

第二に、国際ソーシャルワークの多元的な社会的表象があるとするならば、それにかかわる一つの要因として関与者を挙げることができる。変わりゆく世界における多様な関与者による言説生成の過程が重要な論点となりうる。とくに、近年においては、インディジナス・ソーシャルワーク (Gray et al. 2008) や脱植民地主義ソーシャルワーク (Kleibl, Lutz, Noyoo, Bunk, Dittmann & Seepamore 2019) にかかる言説が国際ソーシャルワークの主流言説に与えるインパクトについて分析する必要がある (東田 2021)。つまり、西欧の価値や技術に基づいた国際ソーシャルワークあるいは主流のソーシャルワークに対して、オルタナティブな言説により異議申し立てが行われている (郷堀・染谷 2021)。したがって、国際ソーシャルワークの社会的表象は、それを取り巻くグローバルかつローカルな状況と関与者の声により

変容しうることを考慮する必要がある。

第三に、そのような多様な関与者による集団ダイナミクスから、主流の国際ソーシャルワークの社会的表象の揺らぎが起こりうる。国際ソーシャルワークの前提として、支援する側と支援される側といった二項対立的な関係性（あるいは一方的な植民地主義や覇権主義）が固定的に示される状況があるとすれば、それは脱構築される対象となろう（Hugman 2023; Midgley 2008）。一例として、マクロレベルでは、以前に国際援助を受けていた新興国が国際援助を実施することもあるし、南南協力や三角協力の枠組みで国際協力が実施されることもある。他方、国際開発の文脈においては、「現地」——あるいは「ホスト国」——のソーシャルワークや関連活動、営みが主であるはずであるが、外部からのソーシャルワーク介入が主として想定されるならば、正当化と権力性を伴う言説実践を含む、関与者間の相互作用について批判的に検討する必要がある（Higashida 2022a）。それらの関係性を考慮すると、現場レベルでは実践家が自身の活動をどのように語り位置づけるかという問題、さらにはジレンマにもつながりうる（東田 2020a; 2020b）。

第四に、現時点で国際ソーシャルワークの主流言説の周辺にある人びとにとって、その社会的表象の日常における浸透にかかわる個別的な文脈と状況を理解する必要がある。たとえば、日本においては、国際ソーシャルワークの普及や浸透が十分には進んでいないと思われる要因の一つとして、教育研究の状況を挙げることができる。一般的に、日本の社会福祉士等の養成課程においては、国内の社会福祉問題とそれに対する制度・政策や実践の方法、そして実践手法として欧米流のソーシャルワークが主に教授されると思われる。日本における国際ソーシャルワーク教育は、多くの議論や実践事例が先人たちによって示されてきたものの、いまだ周辺的な科目や教育内容である傾向が見受けられる（Higashida 2022c）。国際ソーシャルワークに関する議論も、これから活発化していく余地が十二分にある（松尾 2021）。それは、社会福祉士等の養成課程を専攻する学生にとっては、国境を越える問題に将来取り組む機会が開かれているものの、現時点では、国際ソーシャルワークを、自己の物語に関連付ける機会は限定的であることを意味しているのかもしれない。

第五に、そのように実践家において、国際ソーシャルワークの語りやその表象が個別の文脈に依存する部分があるとすれば、人びとの相互作用

や実践の下で、「国際ソーシャルワーク」という言葉によって社会的現実が草の根で構成される場合もあれば、構成されない場合もある。たとえば、A氏は次のように語った。

そうですね。どこで働いたとしてもまずは対等に向き合うっていうところと相手を尊重することは、その方が持っている力というか、そこを引き出すようななかかわり方をするっていうのは、やはりこれはどこに行っても、しかも相手が障害者じゃなくても大事なかかわり、人と人とのなかかわりの中で大事なことなのかな、って。(A氏、2021年6月23日; Higashida 2022b:SI)

このように、実践家は、国際ソーシャルワークやソーシャルワークとして必ずしも語らずとも、「現地」の人びととの活動にかかわることもありうる。その場合は国際ソーシャルワークやソーシャルワークと実践家のアイデンティティが心理社会的に遠いこと、あるいは直接関連付けて語られないことさえ想定される。

5. 研究と実践への含意と限界：実践家の語りとの関連の探求

本稿の議論では、実践家の語りに着目し、その集団におけるダイナミクスと過程を想定しながら、社会的表象としての国際ソーシャルワークのあいまいさ、およびその複合性に焦点を当てて論じてきた。国内および国際的な潮流を考慮しながら、その議論から導きだされる今後の研究や実践に向けた含意と限界を示す。

前提として、国際ソーシャルワークに関する国内外の議論は継続されることを考慮する必要がある。それに関する研究や実践を通じて、より多くの関与者が相互に合意しうる定義、視点、技術等が検討されていくであろう。英語圏の実質的な優位性等により、欧米の論調が主流になる可能性もあるが (Gray et al. 2008)、アフリカからの声 (Kleibl et al. 2019) や仏教ソーシャルワーク⁽¹⁵⁾をはじめとする新たな言説も主張されていく中で、様々な国際的なダイナミクスが起こりえよう (郷堀・染谷 2021)。

しかしながら、国際ソーシャルワークに関する一定の共通の理解が、ある集団において得られたとしても、それが個別の実践や諸個人の語りにおいて関連づけられるかどうかは別の論点である。文化に適したソーシャルワーク実践の研究 (Gray et al. 2008) が示すように、ユニークな社会文化が国内においてさえ存在しており、まして国境を越えて行われる国際ソーシャルワーク実践の文脈において多様な社会文化を考慮する必要があることは言うまでもない。そのような中で、普遍的な国際ソーシャルワークの社会的表象を単に探求するのみでは、主流のソーシャルワークの価値や理論に過度に根ざすような、権力性を強く有する言説に依存することにもなりかねない (Midgley 2008)。

そこで、本論では、国際ソーシャルワークの社会的表象が必ずしも明確ではない文脈において、それを一つの実践ツールとして、個々の協働的实践 (collaborative practice) や対話からの知の協働的創造を探求する意義があることを提案する。これは、社会的表象は諸個人や集団の中での「共同的行為やコミュニケーション」を通じて現実を生成する作用である、という視点に根ざしている (Moscovici 2001)。つまり、ポジショナリティの異なる諸個人の間で、実践や対話を共にする中で、知の創造が探求される。それは、たとえば「援助側」(支援者)による「被援助側」(受益者)に対する一方的な知や技術の移転、あるいは植民地主義的な知の伝搬を前提とするのではなく、関与者間の立場を超えたパートナーシップの下で開かれた対話が求められることを示す (Higashida 2022a; Hugman 2023; Midgley 2008)。

そのような「協働的実践」については、当事者と研究者の相互作用を例にとった杉万 (1998) による表現が参考になる。ここでは、研究者と当事者を国際開発の「現場」で協働するソーシャルワーカーや当事者等と読み替えることができる。

理論を背景にした研究者との協働 (葛藤をも含む) によって、当事者が、何がしか新しい物象化をしうること (あつ、そうか、自分たちがやってきたことは、そういうことだったのか)、さらには、新しい物象化の可能性を開きうること (そうだとしたら、明日に向かって、こういう一手もあるじゃないか) である。(中略) そのローカルな協働的実践の記録は、概念の抽象レベルを上げれば、

伝播力を獲得できる。(杉万 1998:203)

そして、「複眼、複数または共通の物差し」(秋元 2020:46)を持った多様ななかかわりやその過程を通じて、国際ソーシャルワークの関与者間において、オルタナティブな言説が探求されるのではなかろうか。それと同時に、現実の関与者との相互作用の中で、国際ソーシャルワークにかかるフェジューな社会的表象や、それに伴うアイデンティティがありうる。それを示唆するものとして、参加者である A 氏の語りを示す。

私はどこへ行ってもお客さんみたいだったんじゃないかな。最終的には少しそれが和らいだかもしれない。(A 氏、2021 年 6 月 23 日; Higashida 2022b:351) ⁽¹⁶⁾

この語りは、「現地」の人びととの交流や実践の中で、自身の位置づけについてときに自問しながらも、人びととの距離感の質の変化を語ったものとして解釈することができる。これは A 氏一人の語りに過ぎないが、そのような物語が他者と共有されていくことで社会的現実を草の根から検討していく手掛かりを見出す可能性を示唆する。それは、グローバリゼーションの下にある社会の中でのソーシャルワーク実践であっても、ローカルな文脈や文化、言語が重要であるという指摘 (Webb 2003) にも呼応するものである。

しかしながら、本稿の議論には多くの限界がある。その最も大きな限界は、筆者や調査参加者の経験と語りを参照したものの、非常に限られた事例の抽出に過ぎないことである。筆者の想定や仮説に大きく依存しており、より厳格な学術的な議論や批判的な検討が必要である。加えて、日本を起点とし、アジア諸国を文脈としてきたが、それ自体への批判的な議論もありうる。たとえば、秋元 (1995) が日本の国際社会福祉研究について、自国 (日本) から発想することとアジアを文脈とした議論への偏重を懸念しているとおりである。また、本稿では、厳格な社会的表象理論や社会構成主義からみれば理論的な矛盾を有している。その一つは、社会的表象を議論の中心に据えながらも、他の概念 (たとえば、社会的アイデンティティや実践) を並列的に

記述しており、理論的に厳密に統一的な整理が行われているわけではない。本稿の記述には「主観」と「客観」を二項対立的に暗示する部分も含むが、それら自体に対する社会的表象の作用（矢守 2001b）についての徹底した議論は行わなかった。さらに、社会的アイデンティティ理論からの社会的表象理論への批判（ホッグ・アブラムス 1995）やその理論的關係性（Marková 2007）等についても議論しなかった。したがって、本稿は一つの説明の試みに過ぎない。

6. おわりに

本稿の目的は、国際開発の文脈において、ソーシャルワーカーの語りを出発点とし、国際ソーシャルワークの社会的構成の過程について社会的表象理論の観点から探索することであった。実践家の語りを参照したうえで、社会的表象理論の援用により、国際ソーシャルワークの社会的現実と実践家の物語との接点について議論した。本稿は様々な限界を有しているものの、国際ソーシャルワーク研究に貢献しうる部分がある。本稿では日本の文脈から議論したが、そのテーマは、国境を越える視点から、多様な語りや声とともに研究されていく必要がある。今後、国際ソーシャルワークを、国境を越える文脈の下で再検討および再構築していくことを目指していきたい。それにより、国際ソーシャルワークをより開かれたものにしていくことをともに探求したい⁽¹⁷⁾。

謝辞

本稿で引用した調査に参加いただいた元・青年海外協力隊の語り手の皆様と、ご協力いただいた JICA 青年海外協力隊事務局に厚く御礼申し上げます。本稿は、筆者が 2022 年 2 月から参加している「アジア国際社会福祉研究会」における議論からインスパイアされたのち、筆者の先行研究を踏まえて、2022 年 7 月 25 日までに書き上げたものである。同研究会の発起人である原島博・ルーテル学院大学教授と秋元樹・淑徳大学アジア国際社会福祉研究所（ARIISW）名誉所長をはじめ、同研究会メンバーの皆様方に感謝申し上げます。また、本誌への投稿の推薦をいただいた大阪大学大学院人間科学研究科の河森正人教授、貴重な資料のご提供およびコメントをいただいた熊本大学大学院教育学研究科の八ッ塚一郎教授、ARIISW の松尾加奈 上席研究員に深謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP 21K13477、JP21KK0039 の助成を受けて実施した。

注

- (1) 同会議に提出された Eglantyne Jebb の遺稿で、1929 年に会議録に掲載された (Jebb 1929)。Boyle (1929:657) の代理の発表原稿にも同用語がみられる。本資料は松尾加奈・上席研究員より共有いただいた。
- (2) 日本国内において、「国際ソーシャルワーク」という言葉が一般的に用いられるようになったのは比較的最近のことである。少なくとも 2000 年以前は、「国際社会福祉」や「国際福祉」等の用語の方がより一般的に用いられ、議論が重ねられてきたと思われる (e.g. 秋元 1995; 森 1996)。International social work の訳語、解釈、他の用語との関係性等については議論の余地がある (秋元 2020)。
- (3) これは簡易的な分析に過ぎず、本来であれば、背景や内容の分析が必要である。たとえば、使用したサンプルのうち、『ソーシャルワーク研究』誌において、2017 年以降、「国際ソーシャルワーク情報」というシリーズ名が含まれる割合 (42.9%) の高さが顕著である。
- (4) この定義が示唆するように、共生学 (河森・栗本・志水 2016) と国際ソーシャルワークの視点には親和性がある。
- (5) これは国際協力等においてしばしば用いられる表現である。特定のポジションリティを想起させるものであり、あえて括弧書きにした。とくに、「開発一低開発」あるいは「援助者一被援助者」のような旧態依然たる構図・構造については、批判的に議論されるべきである (東田 2022)。たとえば、佐藤 (2016:2) は「いまや二つの対立軸は一つに融解し『生存』と呼ぶべき共通の課題群を生み出しつつある」として、変わりゆく開発の前提や諸相について述べている。あるいは、方法論的ナショナリズム批判の視点からも検討することができよう。佐藤 (2009:13) によれば、それは、「①世界が国民国家を基礎的単位として構成されているということ、②国民国家が『社会』と一体化された均質な組織ないし共同体であることを、問われることのない所与とする」前提を批判的に検討するものである。
- (6) 「開発」をどのように捉えるかという論点もあり、ソーシャルワーカーとしての立場を超えたより多角的な議論が必要である。たとえば、エスコバル (2022) は開発言説について批判的な議論を行うとともに、多元世界 (pluriverse) の研究の意義を示す。
- (7) 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所が継続的に取り組む仏教ソーシャルワークや国際ソーシャルワークにかかる研究等において用いられることがある本用語を参照した (秋元 2018)。
- (8) 本稿が参照する先行研究は青森県立保健大学研究倫理委員会にて承認を受けた (承諾番号 21009 : 移籍に伴い、2022 年 6 月に淑徳大学にて再認済み)。また、既刊ジャーナル出版社 (Wiley) より Higashida (2022b) にかかるオープンデータの再利用の許諾を得た。注 16 にかかる語り以外のデータは、同先行研究本文では直接的には分析・引用されていないが、オープンデータの補足資料 (supporting information) に一部含まれている。以下、その補足資料に語りが部分的に含まれる場合は、「Higashida 2022b:SI」として記す。

- (9) 筆者は社会的表象理論の観点から、米国の精神障害のある当事者における「リカヴァリ」(recovery)の浸透の過程について分析したことがある(東田 2005; 2007)。以下、本稿における社会的表象理論についての説明の一部(引用部分の仮訳含む)は修士論文(東田 2005)を参考にした。なお、卒業論文作成の際には社会心理学およびフィールドワークについて岩手県立大学の細江達郎名誉教授にご教授いただき、修士論文作成においては大阪府立大学大学院の藤井達也元教授にご指導いただいた。
- (10) 日本においても、社会心理学者らが本理論を用いて社会の事象と現実を捉えてきた。たとえば、社会的現実としての活断層の普及が分析された(矢守 2001a)。
- (11) ハッ塚(2014)は、物象化について、「反転」と「流通」に再整理している。
- (12) 秋元(2020)は国際ソーシャルワークを3期に分けて説明している。つまり、第1期の北半球の中での「国際」ソーシャルワーク(知識や情報の交換、自国への活用等)、第2期の北半球から南半球への「国際」ソーシャルワーク(ソーシャルワーク教育や実践モデルの移転、途上国支援等)、第3期の相互関係による「国際ソーシャルワーク」(対等性の探求等)である。
- (13) 認知的多相性について、ハッ塚(2014:172)は「厳密な専門知識と、それとは別物の日常的理解のように、矛盾する異質なリアリティが同じ社会で併存すること」と端的に説明している。
- (14) さらに言えば、国際ソーシャルワークは、新たな社会的現実を構成する途上にあるものとして、捉えることも可能かもしれない。
- (15) 「仏教ソーシャルワーク」を社会的表象理論から検討することもできよう。アジア国際社会福祉研究所は「仏教ソーシャルワーク」(Buddhist social work)という用語とともに、アジア諸国の研究者と協働して取り組んできた(秋元 2018)。そのことで、いまや、多くの人びとが仏教ソーシャルワークの社会的表象あるいは社会的現実を体感し、語り、探求している、と説明することができる。
- (16) 先行研究において、英訳後に引用された語りである。
- (17) 2022年度に、「アジア国際社会福祉研究会」が国際ソーシャルワークの実践と教育の関係性についての国内ヒアリング調査を実施した(東田・松尾・原島 2023)。

参考文献

- 秋元 樹 1995 『『国際社会福祉』を創る—国際社会福祉の実践／研究と基準』『福祉を創る—21世紀の福祉展望』pp.97-101、有斐閣。
- 秋元 樹 2018 「ソーシャルワークの第3ステージ：ソーシャルワークを世界のものに」郷堀 ヨゼフ他編『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ』pp.5-8、学文社。
- 秋元 樹 2020 「国際ソーシャルワークの目的と理念」岡 伸一・原島 博編『新世界の社会福祉—第12巻 国際社会福祉』pp.25-50、旬報社。
- 石河 久美子 2019 「多文化ソーシャルワークの実践の現状と課題—共生社会の実現に向けて—」『社会福祉学』59(4):85-88。

- エスコバル、アルトゥーロ 2022 北野 収訳『開発との遭遇—第三世界の発明と解体』新評論。
- 岡 伸一・原島 博編 2020『新世界の社会福祉—第12巻 国際社会福祉』旬報社。
- 小原 眞知子・木村 真理子・武田 文編 2022『国際ソーシャルワークを知る—世界で活躍するための理論と実践』中央法規出版。
- 河森 正人・栗本 英世・志水 宏吉 2016「共生学は何をめざすか」河森 正人・栗本 英世・志水 宏吉編『共生学が創る世界』pp.1-16、大阪大学出版会。
- 郷堀 ヨゼフ・染谷 有紀編 2021『ソーシャルワークのグローバリゼーションに世界のソーシャルワーク研究者は抗う—脱植民地化・土着化・スピリチュアリティ・仏教ソーシャルワーク』淑徳大学アジア国際社会福祉研究所。
- 佐藤 仁 2016『野蚕から生存の開発論—越境する援助のデザイナー』ミネルヴァ書房。
- 佐藤 成基 2009「国家／社会／ネーション—方法論的ナショナリズムを超えて」『ナショナリズムとトランスナショナリズム—変容する公共圏』pp.13-31、法政大学出版局。
- 杉万 俊夫 1998「実践としてのグループ・ダイナミクス」『実験社会心理学研究』38(2):202-204。
- 東田 全央 2005『米国のメンタルヘルス領域における「リカヴァリ」の普及に関する研究—社会的表象理論の観点からの検討』大阪府立大学大学院社会福祉学研究科修士論文（未公開）。
- 東田 全央 2007「米国の精神障害がある当事者における『リカヴァリ』の浸透」『響き合う街で』42:21-26。
- 東田 全央 2020a『もう一つのソーシャルワーク実践—障害分野・災害支援・国際開発のフロンティアから』大阪公立大学共同出版会。
- 東田 全央 2020b「国際開発ソーシャルワークのフロンティアにおける挑戦—二国間の協働実践の文脈における関係性についての考察を中心に」岡 伸一・原島 博編『新世界の社会福祉—第12巻 国際社会福祉』pp.410-426、旬報社。
- 東田 全央 2021『国際開発ソーシャルワーク入門』大阪公立大学共同出版会。
- 東田 全央 2022「ソーシャルワーク実践における地域・民族固有の知、外来知、越境する知—スリランカと日本の実践家を対象とした質的研究結果の再解釈」『淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 2021年度年報 第6号』pp.1-13。
- 東田 全央・松尾 加奈・原島 博編 2023『国際ソーシャルワークを実践家の声から問う』淑徳大学アジア国際社会福祉研究所。
- ブルーグマン、ウィリアム G・高杉 公人 2002『インターナショナル・ソーシャルワークの基礎—ソーシャルワークはどのように国際社会に貢献するか?』成美

堂。

- ホッグ、マイケル A・アブラムス、ドミニック 1995 吉森 護・野村 泰代訳『社会的アイデンティティ理論—新しい社会心理学体系化のための一般理論』北大路書房。
- 松尾 加奈 2021「国際ソーシャルワーク研究の新しいパラダイムに向けて」『総合福祉研究』25:37-50。
- 森 恭子 1996 「国際社会福祉のカリキュラムの現状—福祉系大学（4 年制）の調査の結果」『社会福祉（日本女子大学社会福祉学科）』36:203-209。
- ハッ塚 一郎 1995「社会的表象に関する理論的考察と実証的検討—『中国』『総合人間学部』の社会的表象をめぐって」京都大学大学院人間・環境学研究科修士論文（未公刊）。
- ハッ塚 一郎 2001「社会的表象研究の実際と方法論的検討—C.Herzlichu “Health and illness”をめぐる考察」『総合研究所報（奈良大学総合研究所）』9:101-116。
- ハッ塚 一郎 2014「新聞記事言説による『いじめ』の社会的な構成と解離：助詞分析による検討」『社会心理学研究』29(3):170-179。
- 矢守 克也 2001a「社会的表象としての『活断層』」『実験社会心理学研究』41(1):1-15。
- 矢守 克也 2001b「社会的表象理論と社会構成主義—W. Wagner の見解をめぐって」『実験社会心理学研究』40(2):95-114。
- ヤング、アイリス・マリオン 2020 飯田 文雄・荻田 真司・田村 哲樹監訳『正義と差異の政治』法政大学出版局。
- Boyle, Nina. 1929. II.—International social service. In *First International Conference of Social Work* (Vol. 1), pp.655-657. Paris.
- Desai, Murli. 2013. *The Paradigm of International Social Development: Ideologies, Development Systems and Policy Approaches*. New York: Routledge.
- Gray, Mel. Coates, John. & Yellow Bird, Michael. 2008. Introduction. In Gray, Mel. Coates, John. & Yellow Bird, Michael. (eds.). *Indigenous Social Work Around the World: Towards Culturally Relevant Education and Practice*, pp.1-29. New York: Ashgate Publishing.
- Healy, Lynne M. 2012. Defining international social work. In Healy, Lynne M. & Link, Rosemary J. (eds.). *Handbook of International Social Work: Human Rights, Development, and the Global Profession*, pp.9-15. New York: Oxford University Press.
- . 2018. International social work curriculum: What should it be? In Matsuo, Kana. Akimoto, Tatsuru. & Hattori, Maki. *What Should Curriculums for International Social Work Education Be?*, pp.11-30. Chiba: The 3rd Shukutoku University International Forum.
- Healy, Lynne M. & Thomas, Rebecca L. 2020. *International Social Work: Professional Action in an Interdependent World (3rd edition)*. New York: Oxford University Press.

- Higashida, Masateru. 2021. Exploring subjective experiences of international social workers in Asia: Content analysis of Japanese field reports. *Asian Social Work and Policy Review*, 15(2):123–132.
- . 2022a. Education and training opportunities for local and indigenous social workers: case studies in disability-related fields from an international development perspective. *Social Work Education*. (in press)
- . 2022b. Exploring how international social workers perceive culturally relevant practices: A case study of Japanese social workers' experiences in other Asian countries. *International Journal of Social Welfare*, 31(3):347–354.
- . 2022c. An inductive content analysis of international social welfare syllabi at national and public universities in Japan: Towards a glocal subject design. *Social Work Education*. (in press)
- Higashida, Masateru. Amarawansa, Ranaweera. & Chulani, Herath. 2022. Exploring the social representations of social work in the Sri Lankan cultural context: A qualitative study. *Sustainability*, 14(23). <https://doi.org/10.3390/su142316197>
- Hugman, Richard. 2023. Decolonising international social work. In Webb, Stephen A. (ed.). *The Routledge Handbook of International Critical Social Work: New Perspectives and Agendas*, pp.449-461. Oxon: Routledge.
- Ife, Jim. 2001. Local and global practice: Relocating social work as a human rights profession in the new global order. *European Journal of Social Work*, 4(1):5–15.
- Jebb, Eglantyne. 1929. II.—International social service. In *First International Conference of Social Work* (Vol. 1), pp.637–655. Paris.
- Jovchelovitch, Sandra. & Priego-Hernandez, Jacqueline. 2015. Cognitive polyphasia, knowledge encounters and public spheres. In Sammut, Gordon. Andreouli, Eleni. Gaskell, George E. & Valsiner, Jaan. (eds.). *The Cambridge Handbook of Social Representations*, pp.163–178. Cambridge: Cambridge University Press.
- Karikari, Isaac. & Bettmann, Joanna E. 2013. Introduction: International practice issues. In Bettmann, Joanna E. Jacques, Gloria. & Frost, Caren J. (eds.). *International Social Work Practice: Case Studies from a Global Context*, pp.20–30. Oxon: Routledge.
- Kleibl, Tanja. Lutz, Ronald. Noyoo, Ndangwa. Bunk, Benjamin. Dittmann, Annika. & Seepamore, Boitumelo. (eds.). 2019. *The Routledge Handbook of Postcolonial Social Work*. Oxon: Routledge.
- Lévesque, Maude. Negura, Lilian. Gaucher, Charles. & Molgat, Marc. 2019. Social representation of social work in the Canadian healthcare setting: Negotiating a professional identity. *The British Journal of Social Work*, 49(8):2245–2265.
- Marková, Ivana. 2007. Social identities and social representations. In Moloney, Gail. & Walker, Iain. (eds.). *Social Representations and Identity: Content, Process, and Power*, pp.215–236. New York: Palgrave-Macmillan.
- Midgley, James. 2008. Promoting reciprocal international social work exchanges:

- Professional imperialism revisited. In Gray, Mel. & Coates, John. (eds.). *Indigenous Social Work Around the World: Towards Culturally Relevant Education and Practice*, pp.31–45. London: Routledge.
- Moscovici, Serge. 1973. Foreword. In Herzlich, Claudine. *Health and Illness: A Social Psychological Analysis*, pp.ix–xiv. London: Academic Press.
- . 1981. On social representations. In Forgas, Joseph. (ed.). *Social Cognition: Perspectives on Everyday Understanding*, pp.181–209. London: Academic Press.
- . 1984. The phenomenon of social representations. In Farr, Robert. & Moscovici, Serge. (eds.). *Social Representations*, pp.3–69. Cambridge University Press.
- . 2001. *Social Representations: Explorations in Social Psychology*. New York: New York University Press.
- Negura, Lilian. & Lévesque, Maude. 2022. Understanding professional distress through social representations: Investigating the shared experience of healthcare social workers in Canada. *International Social Work*, 65(6): 1184–1200.
- Razack, Narda. 2002. A critical examination of international student exchanges. *International Social Work*, 45(2):251–265.
- Wagner, Wolfgang. Duveen, Gerard. Farr, Robert. Jovchelovitch, Sandra. Lorenzi-Cioldi, Fabio. Marková, Ivana. & Rose, Diana. 1999. Theory and method of social representations. *Asian Journal of Social Psychology*, 2(1):95–125.
- Webb, Stephen. 2003. Local orders and global chaos in social work. *European Journal of Social Work*, 6(2):191-204.
- Widmark, Catharina. Sandahl, Christer. Piuva, Katarina. & Bergman, David. 2016. What do we think about them and what do they think about us? Social representations of interprofessional and interorganizational collaboration in the welfare sector. *Journal of Interprofessional Care*, 30(1):50–55.